● 読書感想文コンクール 小学校 4･5･6 学年 の部●

優秀賞

一木　萌花（いちき　もえか） 第五小 ６年生

作品名：同じ目線で
図　書：ヘレン・ケラー

私の家族は皆サッカーが大好きです。私も弟２人もサッカーを習っています。

以前、盲学校の先生でブラインドサッカー日本代表でもある黒田選手が学校に来て話をしてくれました。その時目が見えなくてもがんばっている姿に刺激を受けました。そんな時、色んな偉人の話がのっている本を見つけ、目と耳に障害を持っているヘレン・ケラーについてもっと知りたくなりました。どんな一生を過ごしてきたのか、どんなすごい事をしたのか知るために、この本を読むことにしました。

ヘレンは赤ちゃんの時、病気で視力と聴力を失ったため、言葉というものを知らずに育ちました。自分の気持ちを表現できないいらだちから　獣のように暴れることが多かったそうです。家族もヘレンを甘やかして育てていました。しかしサリバン先生と出会い、二人だけで生活を始めると、サリバン先生はヘレンを厳しく育てました。私は時々、中耳炎で耳が聞こえづらくなることがあります。違和感や不安でとてもイライラしてしまいます。だからヘレンの気持ちがほんの少し分かります。もし、私がヘレンの家族だったら、きっと甘やかしてしまうと思います。それが一つの愛情だと思うからです。でも、病気で幼い頃失明した経験を持つサリバン先生はあえて、厳しく育てることによって、わがままを直し、やさしい子に育てる事こそ本当の愛情だと分かっていたんだと思います。

ヘレンはサリバン先生と暮らすようになって言葉を覚えたいと強く思うようになりました。盲学校では点字や指文字を覚え、ろう学校では声の出し方を覚えたそうです。その後一般の大学でたくさんの学問を勉強したというので驚きました。目が見えなく耳が聞こえないヘレンにとって大学まで行って勉強する事が並大抵の努力ではできなかったと思うからです。今の私にここまで頑張れるものがあるのかなと考えました。せめて大好きなサッカーではしっかり目標を立て、とことん頑張っていこうと思いました。

ヘレンはたくさんの人々が傷付くだけの戦争に反対する活動をしていました。し

かし日本が真珠湾を攻撃したことによりアメリカの参戦を認めました。その時ヘレンは戦争で体が不自由になったり失明した兵士達を見舞う事を自分の使命にしたそうです。日本に腹を立てていたはずのヘレンなのに広島や長崎の原爆の犠牲者に会うために日本にも訪れてくれたそうです。この事からヘレンは「貧しい人々、困っている人を助けたい。」というたった一つの強い信念を貫いて生きたんだなと感じました。

この本を読むまで、ヘレン・ケラーは可哀そうな人なんだと思っていました。何故なら目だけでなく耳にも障害がある人だからです。でも、可哀想だと思うことこそ失礼なことだったんだなと気付きました。ヘレンだけでなくこの本に登場する障害を持った人々も黒田選手も、障害を持たない私達以上に意欲的に活き活きと生活しているからです。障害があるからと特別視するのではなく、皆が安全で住みやすい社会を作ることが大切だと思います。今の私に出来る事の中に、点字ブロックの上に自転車を止めない、点字ブロックで遊ばない、白杖を持った人がいたら通行の妨げにならないように気を付けるなどがあると思います。

皆が同じ目線で、当たり前に周りの人を思いやれる世の中になったら良いなと思います。